第二回　十二月十三日（土）午後一時始

能組

蝉田舎

仕舞

丸村（キリ）　上野朝彦
利（キリ）　井戸良祐
齊藤信輔　山田薫

地謡　大槻裕一　梅若礼久　大西寺澤　幸祐

素謡

葵上

水田雄一　生知晤哉

武富康之　山本麗晃

地謡　今村哲朗　山本正人　松浦信一郎　林本大

鉢木

常世ノ妻　観世三郎太
佐野源左衛門常世　観世清和

能

最明寺時頼　福王茂十郎　喜多雅人　二階堂
従者　広谷和夫　同　中村宜成　同　佐々木秀
替装束　山本哲也　替之型　水晶祐　赤井啓三

替間　地侍　鈴木実　同　井口竜也　同　茂山宗彦　太刀持　茂山千之丞

後見　上野雄三　梅若猶義

地謡　大槻裕一　林本大　井戸良祐　長山耕三　寺澤幸祐　赤松禎友　大槻文蔵　山本博通

〈休憩十五分〉

萩大名

狂言

茂山七五三　鈴木茂山宗彦実

後見　増田浩紀

国栖

能

王（姥）　井上正晴
上（天女今）　村野雄介　哲朗
上野朝義

白頭　福王知登
天地之声　広谷和夫　喜多雅人　成田達志　守家由訓　上野口亮　田悟
間　茂山千之丞　井口竜也

後見　武富康之　山本博通

地謡　山本麗晃　上野朝彦　齊藤信輔　水田雄晤　井戸和男　大西礼久　山本章弘　梅若基徳

通盛

仕舞

善知鳥　梅若基徳　赤松禎友
僧　上野雄三

地謡　山田薫　梅若堯之　長山猶義　耕三

（午後五時三十分　終了予定）

附祝言

能『鉢木　替装束・替之型・替間』

修行僧（ワキ）が鎌倉に上ろうとして雪の上野佐野（こうずけのくにのさの）に着き、とある家に一夜の宿を乞うが、留守居の妻（ツレ）から断られる。帰ってきた亭主（シテ）も見苦しい所だからと断るが、妻のとりなしで僧を呼び戻す。夫婦は粟飯でもてなし、僧のために愛蔵の梅桜松の鉢の木（盆栽）を焚いて暖をとる〈クセ〉。僧が素性を尋ねると、亭主は本領を一族に横領されて零落した佐野源左衛門常世だと答え、鎌倉に大事があれば、痩馬で真っ先に馳せ参じるつもりだと言う。僧は回国中の最明寺入道時頼だったが、それと名乗らずに立ち去る〈中入〉。地侍（アイ）が関八州の武士に参上せよとの号令を告げると酒盛になる（今回は替間）。常世も痩馬で馳せ参じ最明寺から本領を安堵され、梅桜松にちなむ所領を与えられたのだった。後は小書（特殊演出）により、シテとワキの装束が変わると共に最明寺の従者（ワキツレ）の人数が、複数となる。

能『国栖　白頭・天地之声』

浄御原の天皇（天武）（子方、ワキ、ワキヅレ）が大友皇子に追われて吉野に遁れ、国栖川べりの小家にたどり着くと、家の主の老夫婦（前ジテ、前ツレ）が舟で戻ってくる。夫婦は天皇が数日前、何も口にしていないと聞いて、根芹と釣ってきた鮎を提供する。漁翁が残った鮎を川に放すと鮎は生き返り〈鮎ノ段〉、漁翁はこれは都に還幸される瑞祥だと言う。そこに追手がかかるが、夫婦は舟を伏せて天皇を隠し、追手（アイ）を追い返す。天皇は還幸したら、かならずこの恩に報いようと言って感謝する。夫婦が天皇をどう慰めようかと思案していると、嶺の松風に乗って音楽が聞こえ、夫婦は姿を消す〈中入〉。すると、天女（後ツレ）が現われて舞を舞い〈下リ端舞（楽）〉、続いて、吉野蔵王堂に祀られる蔵王権現（後ジテ）が現われ、王威を軽んじてはならないとして神威を示す。その結果、国は天武の聖代となったのだった。今回の後ジテは白頭となって幕内で謡い出すが、そこに「天」と「地」の文句がある。『能楽手帖』の「展開」に小書きの説明を加えた

・公演における許可のない写真撮影・テープ録音・携帯電話等においての撮影・録画は固くお断りいたします。
・発熱や咳など、風邪の症状がみられる場合は、ご来場をお控えいただきますようお願い致します。